

令和6年度 西東京市立向台小学校 学校評価報告書						
学校教育目標 ○よく考える子 ○健康な子 ○思いやりのある子 ○進んでやりぬく子						
目指す学校像(ビジョン)						
【目指す学校像】 子どもたち一人ひとりが安全・安心に学ぶことのできる学校						
【目指す児童像】 ◆課題を見だし解決する力を身に付け、深く考えることができる子ども◆自他を尊重し、共生の意識をもつことができる子ども◆規則正しく生活し、心と体を健康に保つことができる子ども◆他者と協働しながら自立的に学び続ける子ども						
【目指す教師像】 子どもの学びを支えるプロとして、日々自分自身を高めるとともに組織の一員としての自覚をもち、他者と協働する教師						
前年度までの学校経営上の成果と課題						
【成果】全教員は、授業改善推進プランを活用し、目指す児童像に向けた授業改善の取組を行うことができた。※全教員がICT機器を効果的に活用し、目指す児童像の具現化に努めた。						
【課題】授業改善・校務改善に向け、教員同士で意見交換・協議等を日常的に行い、高め合うなどの組織的風土の構築及び取組内容の確実な向上						
	具体的方策	自己評価 4段階 取組目標 達成目標	分析・改善方策	学校関係者評価	次年度の重点・方針	
確かな学力	①学習スタンダードを活用した学習規律を身に付けるための教員間の共通理解の徹底	3	3	約90%の児童が、「学習のきまり」を守ったと自己評価している。約95%の保護者が学校の基礎学力向上の取組に肯定的である。100%の教員が学習スタンダードを活用し、学習のきまりを徹底したと考えている。	・大規模校にも関わらず90%が学習面の目標を達成していることは大きく評価したい。 ・学習スタンダードに基づく「学習のきまり」の意識付けは、学習効果の高まりにつながる。 ・全学年が落ち着いた様子で授業を受けており、教員の授業への工夫や事前授業などの成果だと感じる。	・全教員が授業改善の課題を設定し、毎学期、授業を公開することを通して指導力の向上を図る。 ・発達段階に応じて学習規律を身に付けるために、学習スタンダードを活用し、教員間の共通理解のもと、子ども一人一人の特性に応じた指導を徹底する。
	②ねらいを明確にし、ねらいに応じた学習内容と振り返りのある授業の徹底					
	③協働的な学びの充実に向けた校内ICT研修による教員の機器操作の習得及び情報教育年間計画に基づく発達段階に応じた一人1台専用タブレット端末の活用	3	3	約90%の児童が「授業内容を理解した。」と振り返ることができている。約80%の保護者が「子どもは授業が楽しく分かりやすいと言っている。」と回答している。100%の教員がめあてや振り返りを意識した授業改善に取り組んでいる。	・授業のねらいが明示されることで学びにつながる振り返りができるように思う。ただ、授業参観をしていて必ずしも、全授業で板書されているわけではないところが気になる。 ・授業開始時に「めあて」を明確にすることで授業において何を取り組むのか？ということを見守り育てる機会とする。 ・タブレット等ICT機器の使用がどの程度、児童の視力等に影響があるのか気になることである。 ・スマートフォン等は、保護者の子どもとの関わりにも影響していることが危惧される。	・全教員が授業改善の課題を設定し、毎学期、授業を公開することを通して指導力の向上を図る。 ・発達段階に応じて学習規律を身に付けるために、学習スタンダードを活用し、教員間の共通理解のもと、子ども一人一人の特性に応じた指導を徹底する。
豊かな人間性	④日常生活や各教科等の関連を図りながら実施する、道徳授業35時間の確実な実施	3	3	約90%の児童が道徳の学習を通して、よりよく生きたいという気持ちになる。約90%の保護者が「子どもは思いやりのある行動がとれている。」と回答している。100%の教員が道徳授業を確実に実施している。	・本年度は2学期に道徳授業地区公開講座が行われたが、全校で道徳授業に力を入れているように思う。 ・道徳的な価値項目の押し付けではなく、児童同士がディスカスする授業を目指し、授業の「量(回数)」と「質」の双方が大切だと思う。	・道徳授業地区公開講座を3学期に実施し、1・2学期で把握した子どもたちの道徳の実践力のよさを地域・保護者と共有し、一体となって子どもたちを見守り育てる機会とする。 ・教員間で指導法を共有するなど、「議論する道徳」授業を目指し、授業改善に努める。
	⑤児童による主体的な活動や体験的な活動の意図的・計画的な実施	3	3	95%以上の教員が、主体的・体験的な活動を意図的に取り入れている。約90%の保護者が「子どもは学校が楽しいと言っている。」と回答している。	・運動会等の行事で高学年が率先して活動している姿がとても頼もしく、低学年児童にとっても良いお手本になっていると思う。 ・子どもたち一人一人が何からの役割をもつことは良い経験になるので続けてほしい。	・運動会及び音楽会を軸として、子どもたち一人一人が役割をもち、日々の学習の成果を発揮しながら、主体的・協働的に課題解決に取り組むことを通じて、学びを広げ、深める学校行事を実施する。
総合的な体力	⑥「体づくり運動」の校内研究を核とした体育の授業改善	4	3	約80%の保護者が「学校は、体力を向上させる取組を行っている。」と回答している。約70%の教員が「研究を生かした授業改善ができた。」と振り返っている。	・授業のコマ数が少ない中、創意工夫され、子どもたちの体力づくりに励まれている。 ・朝遊びに積極的に参加する児童が多くいることはとても良いことだが、見守りが教職員の負担にはならないでほしい。放課後遊びの方と連携するなど、見守りサポーターの配置の充実が必要だと思われる。	・今年度の研究を生かし、体づくり運動を中心に体育の授業改善を継続するとともに、学校生活の中でできるだけ運動機会を確保できるよう朝遊びや休み時間等の時間設定、運動遊びをしなくなる環境整備、養護教諭や栄養士と連携した保健指導の工夫に努め、運動や健康的な生活に対する肯定的な意識を高める。
	⑦教育活動全体で取り組む、「なわとび旬間」や朝遊び等を通じた運動機会の創出	3	3	約80%の児童が「体育の授業以外に、運動に進んで取り組んだり、外遊びしたりした。」と振り返っている。	・日々の体育授業の変革は一朝一夕で実現できるものではない。「運動の日常化」を目指して、これからも継続課題として健康教育の一環として取り組んでもらいたい。また、児童アンケートでは20%、教員アンケートでは30%の回答をどう考えていくのが大切である。今後は、スポーツテストの公表を通して、コロナ禍の影響が可視化されれば、児童の体力向上における保護者や地域等との協働の可能性も見えてくる。	・朝遊びの見守りについては、地域との連携を進め、実施できる日数を増やしていく。
健全育成（いじめ対応）	⑧西東京あったか先生推進担当による毎月の確実な研修の実施及び、管理職からの定期的な啓発	4	4	約80%の保護者が、「学校は、一人一人への子どもの声かけを大切にしている。」と回答している。100%の教員が毎月の研修等により、人権感覚の伴った言動を意識して指導している。	「西東京あったか先生」のコンセプトを全教員が体現しているが、厳しく指導すべきこと(いじめや命に関わることなど)についてはより厳しく指導することがあったか先生の役割である。指導を甘くすることがあったか先生になることや教職員が指導しづらくすることにつながらないでほしい。	・西東京あったか先生の趣旨を理解し、全教職員が人権感覚や意識を高め合うことで、服務事故を起こさない姿勢を徹底するとともに、西東京市子ども条例の理解啓発を人権擁護委員の出前授業等を通して行い、子どもの人権意識の向上を図る。
	⑨「いじめ防止リーフレット」を活用した授業等の実施	3	3	約70%の保護者が「学校はいじめ防止や対応を丁寧に行っている。」と回答している。約95%の児童が「いじめはどんな理由があってもいけないことだ」と理解している。	・アンケート結果では約30%の保護者が学校はいじめ対応について、課題や「分からない」と回答している。分からないということは、自分の子がいじめ問題に直面していないと考えられるとともに、学校の取組が伝わっていないことを表している。 ・いじめ問題については保護者の関心が非常に高い。学校からの発信力をさらに高め、保護者を巻き込んだ上で「学校はこれだけ頑張っている」というタイムリーな情宣が必要になってくる。	・東京都教育委員会のガイドラインを基に、いじめに関する授業を行うとともに、いじめはどの学校にも起こることを前提に、研修を通して適切な初期対応力の向上を図る。 ・学校の取組が、保護者に伝わるよう学校便りやHPの改善とともに、アンケートの回収率を上げる工夫に努める。
	⑩ICTの有効活用等を通して、会議時間や印刷物の削減及び業務の効率化	3	3	90%以上の教員が、「自分の勤務時間短縮に取り組むことができた。」と振り返っている。	・すぐるの活用により学校便りが常に保護者に同じタイミングで届くことは本当にありがたい。また、そのことが教員の業務改善につながっているのあればDX化を推進していくべきである。 ・業務全体のスリム化及び業務の標準化の問題も非常に大切だと思うが、時間の問題だけでなく、特に若手教員のメンタル管理の問題が非常に大切になってきている。	・引き続き、校務支援システムを活用し、教職員間の情報共有の効率化を図るとともに、よりよい組織体制の構築を工夫する。 ・管理職が率先して、話を聞いたり、フォローしたりすることを通して、互いに助け合う心理的安全性の高い組織風土をつくる。
	⑪校務分掌の在り方の検討及び年度途中の組織見直し	3	3	90%以上の教員が、「学校業務全体の改善に向けた取組を自ら考えることができた。」と振り返っている。		